

2006年(ワ)第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国

意 見 陳 述 書

—私の父を殺した重慶大爆撃を許さない—

2006年10月25日

東京地方裁判所民事第13部 御中

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告

重慶市綦江県古南鎮孟家院302-6 危昭平

1 私は危昭平と申します。1932年4月29日生れで、今年74歳になります。私は、重慶市郊外の綦江県に生まれ、現在もそこに住んでいます(別添付図を参照)。

私の父危永庄は、綦江県政府の職員でしたが、1940年7月5日の日本軍による綦江爆撃で殺されました。当時、父は41歳でした。

2 私の実母は私が3歳の時に病死しました。その後、父は再婚しましたので、父が殺された当時、私は、父と継母の蔡澤碧と一緒に綦江県城の北街に住んでいました。

私には15歳ほど歳が離れている兄危昭文がいましたが、すでに家を出て

麻子橋小学校（現在の登瀛小学校）で教師をしていました。

父が爆撃で死亡したとき、私は小学2年生で、ちょうど夏休みでしたので、継母の実家のある北渡郷に遊びに行っていました。7月5日午後、遠くの方で爆発音が聞こえたのでそちらの方向を見ると、空が真っ赤になっていました。8歳の私でも、中国に戦争をしかけている日本軍の爆撃だとわかりました。

私は、綦江県城内の両親の安否がとても心配でした。しかし祖母（継母の母）は、日本軍の飛行機が再び綦江県城を爆撃することを心配し、私が両親の元へ行くことを許しませんでした。祖母は、両親の様子を調べるために蔡九誠という従兄弟を綦江県城へ行かせました。その夜、従兄弟は、爆撃で死亡した叔母の蔡王氏（母方の伯父の妻）の遺体を運んで戻ってきました。その従兄弟から、この日の日本軍の爆撃で、私の父が殺され、継母の蔡澤碧も重症を負ったことを聞き、私は目の前が真っ暗になるほどの強いショックを受けました。

一方、兄は、7月5日の綦江爆撃があった翌日、従兄弟の危迪（父方の叔父の息子）と綦江県城へ戻りました。私は、県城に戻った兄のことも心配していましたが、爆撃から10日後にようやく兄危昭文と会うことができました。私は、兄から、継母が重傷で南山坪の病院で怪我の治療を受けていることを聞きました。間もなく兄と私は、一緒に父の実家のある東溪鎮に行きました。

3 私は、後から東溪鎮にやってきた継母から、爆撃を受けた綦江県城内の悲惨な状況を教えてもらいました。以下は、私が聞いた爆撃の様子です。

7月5日の午後、父は、来客の友人を見送って家に戻ってきた直後、日本軍の飛行機の爆撃を受けました。父は、自宅のリビング・ルームに居たところを爆弾の直撃を受けて死亡しました。父の体はバラバラになってしまい、遺体は見つからなかったそうです。そのため父は埋葬もされませんでした。

継母も自宅の中にいましたが、爆弾の破片が太ももに突き刺さり、また、ふくらはぎは爆撃により一部肉がひきちぎられるという重傷でした。太ももの破片は継母が亡くなるまで体内から取り出せませんでした。

日本軍の爆撃によって、全部で約200平方メートルの広さがあった3階建の自宅は半壊し、さらに、自宅の一部で継母が経営していた旅館も全焼してしまいました。

爆撃後の県城内には至るところに引き取り手のない死体が散乱していました。

私の家の周辺では100人余りの死亡者が出ましたが、その中の20人余りの死体は親族に引き取られましたが、残った90人余りの死体は引き取られなかったそうです。残った死体は、その場に掘られた3つの穴にまとめて埋葬されました。

- 4 このように綦江県城の自宅が爆撃で破壊されたため、私と継母と兄は、父の実家のある東溪鎮で生活することになりました。しかし、継母が爆撃の後遺症で仕事をすることもできなかったため、私の家族の生活は非常に貧しい状態でした。家では、子供の私のために冬用の厚い服を買うことも出来ず、親友から古着を譲ってもらったこともありました。現金収入がないので食べるものにも事欠く有様で、継母の兄弟の家から食糧の援助を受けて、最低水準の生活を続ける状態でした。

そういう生活状態でしたので、私は、小学校は続けて通うことができましたが、中学校には叔父（母方）や叔母（父方）が援助してくれて、ようやく進学することができました。中学校で学業を続けるために、家で借金を重ね、中学はどうか卒業することができました。しかし高校にはいったん進学はしましたが、お金が続かなくなり、結局、途中で退学せざるをえませんでした。

5 私は、高校を中退した後、新中国になった綦江県の人民政府職員や裁判所職員を勤め、その後30年間綦江県漢方薬会社に勤めて、1985年に定年退職しました。

この間に、私は結婚して家庭をもち4人の子供に恵まれましたが、日本軍の爆撃のことを忘れたことはありません。爆撃からすでに66年経ちましたが、私は、常に爆撃で殺された父や伯母（母方の伯父の妻）のことや重症を負った継母のことを思い出しています。とくに、ばらばらにされて遺体すら残らなかった父のことを思い出すと、涙があふれ出てきます。

何の罪もない綦江県の一般住民を殺した日本軍機の爆撃は絶対に許せません。日本政府が無差別爆撃を謝罪しないために、癒されない父の魂は今も世界中をさまよい続けています。

6 私は、日本軍国主義が罪のない綦江県の一般住民に加えた無差別爆撃を許すことができません。

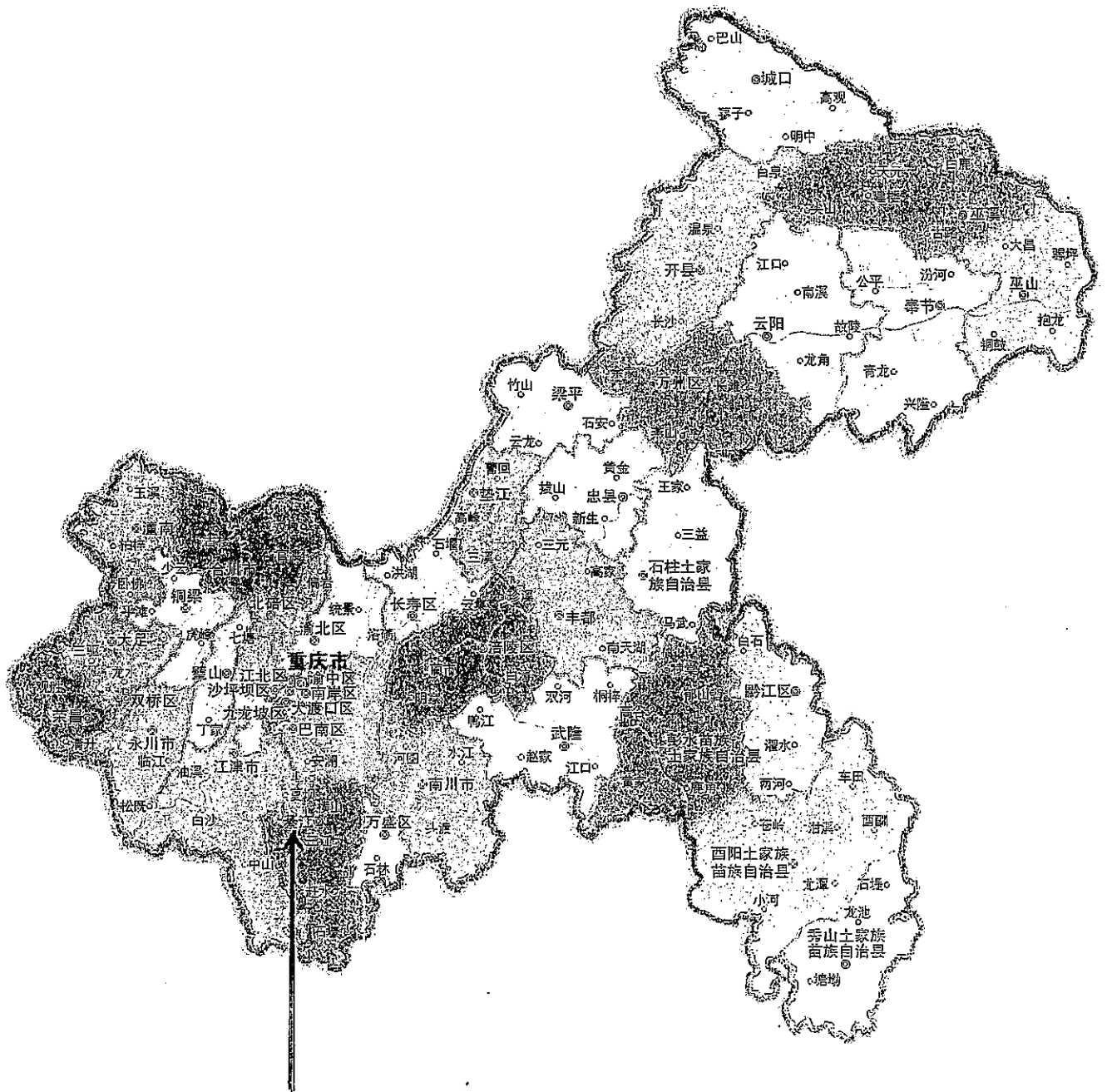
私は、日本軍の侵略戦争が中国人民に加えた残虐な無差別爆撃を告発して、これからの戦争を阻止し、世界の平和を守るため、本法廷で重慶大爆撃で受けた私の家族の災難について陳述しました。

重慶大爆撃に対する法的責任をとらない日本政府は、世界中から信頼されないでしょう。日本政府は、すべての無差別爆撃の被害者に一刻も早く、謝罪と賠償を行うべきです。重慶大爆撃の被害者は、日本政府が誠意を示すのかどうかを見守っています。重慶市民にとって爆撃被害のことは決して過去のことではなく、現在も続いている出来事なのです。

最後に、私たち原告が重慶大爆撃の被害について裁判を提訴したのは真の日中友好を一刻も早く実現するためであることを尊敬する日本の裁判官の方々に心から訴えて、私の発言を終わります。

以上

重慶市全圖



綦江縣





我的父親 永不忘